「家族みんなで汗を流す楽しい酪農を目指して」

岐阜県立岐阜農林高等学校
動物科学科　3年　西川　貴大

私の家は、水田や柿畑に囲まれ、まくわうりや富有柿の産地で有名な本巣市にあります。そこで酪農業と飼料の運送業を行い、水田5ha、牧草地2haを持っている兼業農家です。この家業を、父母、叔父叔母、兄で役割分担して働いています。酪農は主に母が、運送業は、父が社長となり、叔父・叔母と兄が一緒に働いています。

また、父は運送業のあいまに牧草地と水田の管理をし、冬には酪農も手伝っています。

運送業については、自動車関係の短大を卒業した一番上の兄がいずれ引き継ぐつもりで働いています。酪農は、2番目の兄が引き継ぐつもりで大学に通っていました。

私は父の手伝いで飼料の運搬をしたり、母を手伝って搾乳などをするうちに、牛や動物に興味がわいてきて、専門的に勉強したいと思い本校に入学しました。その時は、まだ何となく「いずれ家業を継ぐだろう」という程度の考えでした。運送か酪農か、あくまでも漠然としたものでした。

しかし、本校で勉強しているうちに、将来は酪農をやっていきたいという思いが強くなりました。

そして、さらにこの思いを決定づける大きな出来事がおこりました。酪農の後継者のはずの二番目の兄が、大学在学中に繁殖技術について興味が深まり、資格を取得した後、郡上市で人工授精師として働くことを決めたのです。

兄がうちの酪農に携われなくなったことで、私が主になって家の酪農を引き継ぐことに現実味がでてきたのです。

それからというもの、家の経営について真剣に考え始めるようになりました。

まず私は、酪農を実質一人でがんばっている母に楽をしてほしいと思っています。小さい頃から母の仕事を見て、一番大変なのは除糞です。我が家の牛舎は、つなぎ飼い式でホルスタイン種の搾乳牛16頭、育成牛5頭を飼っていますが、女手一つで十頭以上の糞を、牛床からかき出して、まとめて一輪車に乗せ、堆積場まで何度も運ばなくてはいけないからです。除糞のための設備をもっと充実させたらと思いますが、ここに割く余裕がありませんでした。私も、学校から帰った後や、休日に手伝っていますが、毎日母が一人でやっていることを思うと、頭が下がる思いです。今までは何とかやってこれましたが、親の年齢を考えるとこれからはもっと、大変になることが目に見えています。何とかしなければと真剣に思うようになりました。

現在、私の家の収入の割合は、運送が約70％を占め、酪農による収入は15％程度しかありません。私はこの割合を増やしたいと思っています。

父や兄がやりがいのある仕事だとしてがんばっている運送業ですが、岐阜県での酪農家の

減少傾向を見ていると、これから先、安定した収入があるとは思えないからです。さらに、化石燃料の供給は近年不安定で、昨年のような急激な値上がりも考えられます。輸送コストがかさむと収入は確実に減少してしまいます。これは大きな不安材料です。私としては運送業に将来的な魅力が考えられないのです。

一方酪農では、まだまだ収入アップが見込めます。牛群の能力を上げればいいということに気付きました。そのため、まず、牛群の改良技術に注目した酪農経営を目標にしたいと思います。

現在の我が家の平均乳量は年間１頭あたり7,000kgと、教科書でいう平均程度のものです。最初の目標は牛群の乳量を平均1,000kg向上させることで、15頭の牛群の場合、現在の乳価で計算すると、年間147万円の収入アップが期待できます。まだまだ努力目標は上げられます。

昨年、県の酪農家が集まる酪農スキルアップセミナーに参加させていただきました。そこでお会いした本校の卒業生の先輩の家では、牛群改良をすすめ、牛舎の平均で１頭あたり10,000kgの乳量という驚異的な牛の話を聞きました。先輩のように牛群改良を効果的に行えれば、年間３００万円の収入アップが期待できます。高能力の牛を増やすことができれば、少ない飼養頭数でも高収入を得ることができるのです。

そのためにはまず、牛の能力を把握して、選抜と更新を確実に行わなければなりません。選抜していく中で、いずれ淘汰すべき牛には肉牛の子牛を産ませます。肥育牛は価格の変動が非常に大きいものですが、状態が良ければ、後継牛を新たに購入する程度の収入増が見込めます。

もう一つ可能性があります。支出を中心に経営の内容を見直してみると、飼料代が意外に多いことに気付きました。なんと、粗飼料の購入代が１２０万円を超えていたのです。父が運送業で多忙なため、粗飼料を牧草地の約２０％しか生産できないからです。

増えた予算で除糞装置を購入し、短縮した作業時間で自給飼料を増やし、飼料購入費を少なくできればと思っています。現在の敷地面積を完全に使い切れば、粗飼料は年間で全て確保できます。私も加わることになれば、管理作業も充分に行うことができます。

こうして、笑顔で働く家族の笑顔が思い浮かべられるようになりました。

今、父はまだ現役で働いています。私はそのあいだに精一杯勉強したいと思っています。大学で専門分野や経営について勉強し、たくさんの知識や技術を身につけるのです。実力を身に付け、家に戻ってきたいのです。

我が家のような、小規模な酪農は、将来が厳しい、つらい未来しか見えてこないといわれます。しかし、私が身につけた知識技術を我が家で努力展開し、経営が順調に伸びれば、この取り組みを個人から地域へ普及させる事ができます。

笑顔で汗をかき、楽しい我が家の姿を発信できたらうれしいです。

この姿を社会のいろいろな人に見てもらえる機会も増えています。近年では、地域の小学校との交流も行われるようになり、さらにチャンスが広がっています。いずれは「酪農教育ファーム」の認定も目指してがんばりたいと思います。このような活動を今後も増やしていき、地域の農業の拡大につながればよいと考えます。

日本の農業が衰退している今日、私たち兄弟をはじめ、これからの世代がいきいきと、日本の農業を盛り上げていけたらと強く願います。